



東西の霊柩車通が、都内某所であいまみえた。東からは、庶民文化研究家で銭湯研究の第一人者でもある町田忍氏。西からは建築史・意匠論から風俗史までを独自の視点で幅広く考察する井上章一氏。本まで出すほど霊柩車を調査・研究した二人の対談。いったい、どんな話が飛び出すのか――。

嗜好の洋式化

町田 僕らが共著『The 霊柩車』を出したころ（一九九二年）に比べて、近ごろは宮型の霊柩車がずいぶん少なくなりましたね。有名人の葬儀も、美空ひばりや松田優作のときは宮型が使われたのに、最近では歌舞伎役者の中村勘三郎のときでさえ洋型が使われました。

井上 京都のお坊さんもよく、袈裟をはおったままでキャバクラ行つたはるよ。和風の茶屋じゃあなく、洋型のお店にね。

町田 !?

井上 祇園で芸子さんとお茶屋遊びするより、最近はミニスカートのほうがええらしいです。あるお坊さんは、京都にいるときと同じように袈裟のまま銀座のホステスさんのいるクラブに入つたら、周りに異様な顔をされて、そのとき、「あ、ここは京都じゃないんだ」と気づいたって。

町田 そりゃ東京じゃ、みんな引きますよ（笑）。井上 これはイメージの問題ですけど、クリスマスチャンの学校のほうが、仏教系の学校よりもなんとなく家柄のよさそうな生徒が集まっている気がしません？

町田 本当のところは別として、その気持ちはちよつとわかるな。僕が通っていたサレジオ幼稚園っていうミッション系の幼稚園では、フェルトの帽子とブレザー姿で、ランチボックスを下げて通園していたんだけど、近所にあった仏教系の幼稚園は上つ張りを着ているだけだったっていう記憶があるから、余計にそう思っちゃうのかもしれない。

井上 京都女子大学という西本願寺系の私立大学では、学生が自分たちのことを「3B」と言っています。「貧乏・ブサイク・仏教」で「3B」なんだけど（笑）、かたや同じ京都の同志社女子大学は「かわいい・金持

ち・キリスト教」の「3K」で通っているんです。そんなこともあって、京都女子大生は「どうせ私たち、3Bや」といって、「貧乏・ブサイク・仏教」を自虐ネタにしているんですよ。

何が言いたいかというと、いまの日本では霊柩車に限らず、伝統的な文化を背負ったもの全般が避けられて、洋型のものに取って代わられつつあるのではないかと思うんです。

結婚式も、神社での神前結婚式よりも、チャペルでの結婚式が好まれますよね。もつと正確に言えば、『チャペルもどき』の場所で、アルバイトで神父をやっているような、なんちゃって神父、立ち会いのものと、見かけばかりがキリスト教的な結婚式を選ぶ人が大半だと思えますが……。

古来、日本では、お葬式のときの服装といえば白装束でしたが、それも西洋化して、いまでは黒装束が当たり前です。一方で宮型の霊柩車は、激減したとはいってもいまだに走り続けている。そういう意味では、宮型の霊柩車を使う文化は、日本人の嗜好が洋式化しつつある現在でも比較的、長続きしているほうだといえるのではないのでしょうか。